

〔續修東大寺正倉院文書後集六〕錢用帳

同日閏天平寶字六年二月六日 下錢壹伯肆拾陸貫壹伯拾玖文略 中

四文箒竹二隻直

〔枕草子九〕人のいへにつぎぐしき物 は、きのあたらしき

〔枕草子十〕いみじくきたなき物 えせ板敷の箒

〔寶藏二〕箒

は、きのまなはさまぐなれど、星の名にこそあやしけれ、洒掃は小學の始にして、王公よりまもつかた、庶人のこらに至るまで、入學ぶべき道とかや、ふせやにおふる名のうさになどよめるも、其名かよひて聞ゆるをや、猶初雪の朝、落花の夕こそ心づかひは有べけれ、君まらずばはねの名に、香箱など、かざり合て、友まつやみぎりぞ興あなる、

はきちぎりちぎる友まつや月の宿

陋室雖磨有那馨 任他塵芥積前庭 櫻欄一本天然帚 風伯煤除日月櫺

さいはらひ

〔北邊隨筆一〕さいはらひ

今俗さいはらひといひて、絹紙などをさきて、小竹にゆひつけ、塵をはらふ具とす、この名、神樂歌にみゆ、奈可止美乃古須水乎、佐紀波良比、伊能利志古登波云々、これよりいふ名なり、中臣のまをす大祓の祝詞の中に、天津菅曾乎、本薊斷末薊切、氏、八針爾取辟、氏云々とありて、菅をさきて、祓の具とせられしものなるをまねびて、塵をはらふ具とはなしけるなるべし、

塵拈

〔易林本節用集知器財〕塵拈チリトリ

〔和爾雅五〕箕出出子禮二禮一

〔調度歌合〕七番 右

ちりととり